

Title	G. クロシック著 ヴィクトリア社会のアルティザン・ エリート
Sub Title	Geoffrey Crossick, An artisan elite in Victorian society : Kentish London 1840-1880
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.4 (1979. 8) ,p.552(148)- 557(153)
JaLC DOI	10.14991/001.19790801-0148
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790801-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

さて、先を急ぐことにしよう。

植木枝盛と福沢諭吉との関係については、土佐で『西洋事情』を読んで刺戟され、明治維新直後、三田の演説館に通い、やがて福沢の思想と行動が明らかになるにつれて次第に離れていったことは、家永三郎教授の研究によってすでに明らかにされている。著者は、家永三郎、外崎光広両氏の研究に触発されて、民権思想のなかでの彼の特徵、枝盛における思想と行動の乖離の問題などを中心に、彼の思想を日本の近代史のなかで位置づけようと努力しておられる。

私は本書を読んで植木についての認識をあらたにしたのは、彼は「外国語が若手で、生涯洋書は手にしていない。人一倍自尊心の強かった彼にすれば、不得手な外国語の学習にプライドが傷つけられることに耐えきれなかったということは大いに可能性のあることである」(255~256頁)という叙述からである。このことは、自由民権思想というものがあくまでの外来のものであり、ヨーロッパをたえず先進国として意識し、たんに思想としてではなく、その思想を生み出したヨーロッパ社会の認識という点で決定的にマイナスの面をもっていると思われる。しかし著者は、筆者とは別の観点からつぎのように論じている。

「しかしいづれにしても、枝盛が同郷の馬場辰猪や中江兆民とは違った思想家になった背景のひとつには、外国語を自らのものとしえなかったことが考えられる。なぜならこの二人は西欧近代を身をもって体験し、英・仏語等を熟知していたが故に、かえって彼我のちがいに気を配りすぎて西欧の思想をそのまま日本にあてはめるのに一種のためらいをもったのにたいし、枝盛は書物を通じて得られた西欧近代の理念を観念的に純化して受けとめているきらいがあるからである」(276頁)。

本論文は、植木枝盛の民権論を、抵抗権を根幹とする憲法草案の検討に焦点において解説しているが、いまこれについて詳細に論評する余裕はない。植木枝盛の婦人解放論について独自の評価がみられるが、しかし彼の行動の軌跡からして、「婦人解放論」と「婦人観」とは別物であったのではなかろうか。すなわち植木には、福沢にはみられないロマンティズムが根強くその行動を支配していたため、その人民主権論は、広汎な階層を包む革命的民主主義(=ブルジョア民主主義左派)の色彩をおびていたが、同時にその強烈な、

ロマンティズムは、彼の民権思想を独特のものとしたのであって、福沢ときびしく対立した点でもある。彼は思想家としては幕末に生れるべき人物であり、その意味では、福沢と比較するよりも、佐久間象山や渡辺崋山などとの対比もまた興味深いと思う。

それぞれ個性的な論文の集成で教えられるところが多いが、三者の関係の理解となると、かなりむずかしい問題を残しているように思う。〔1979年、新書判、341頁、有斐閣、780円〕

飯田 鼎
(経済学部教授)

G. クロシック著

『ヴィクトリア社会の

アルティザン・エリート』

本書の著者 G. クロシックは現在ハル大学経済社会史学部の講師であり、イギリス社会史・労働史学界の指導的研究者——E. ホブズボーム、J. F. C. & R. ハリスン、H. ベリング、S. ボラード、J. サヴィル、E. P. トムスン等——につづくつぎの世代の優れた研究者の一人としてイギリス国内でも注目されている歴史家である。本書はかれの博士論文“Social structure and working class behaviour: Kentish London, 1840-80” (London大学、1976年)を修正・再構成し、Croom Helm Social History Series (総編集者はサセックス大学の J. F. C. ハリスンと S. イェオ)の一冊として刊行されたものである。かれはまた、*The Lower Middle Class in Britain 1870-1914*, 1977 の編集者であり、現在は、1976年に刊行が開始された *Social History* の書評編集者でもある。

1850年代から70年代にかけてイギリスにおける労働運動が体制内化ないし右傾化したことの理由を労働貴族層の新たな興起に求めることが妥当であるか否かをめぐって、近年イギリス労働史学界に一連の論争がおこなわれてきたが、本書もその論争史上に位置づけられるべきものであり、著者自ら述べているように、労働貴族の概念をその分析の中心においている。周知のように、われわれは労働貴族の「経済学的解剖」を E. ホブズボームの先駆的論文に負っているし、その

注 (1) Eric Hobsbawm, *The Labour Aristocracy in Nineteenth-century Britain*, in his *Labouring Men*, 1969, pp. 272~315.

「政治学的分析」をR. ハリスンの著書に負っている。⁽²⁾ これらのマルクシスト歴史家達が労働貴族の概念の有効性を主張するのになんとも、非マルクシスト歴史家H. ベリングは、労働貴族の概念は「歴史的真相にとって有益であるよりも有害である」⁽³⁾と主張したが、*Bee-Hive* の時代と *Northern Star* の時代の労働の世界は明らかに異なっていたのだから、この差異は説明されねばならないだろう。もしも労働貴族の概念によってその差異が説明されえないならば、それに代るなんらかの説明がなされねばならないのだが、ベリングは中期ヴィクトリア期の経済的繁栄一般でその差異を説明するのに充分であるというのである。

クロスィックは本書において、このような一連の労働貴族論争に社会学的分析を導入することにより大きな貢献をなした。かれは特定の産業での諸経験だけでなく、労働者が居住するコミュニティのそれもまたきわめて重要であるとし、その研究対象としてロンドンの東、テムズ河沿いの三つの都市 (Deptford, Greenwich, Woolwich) を選び——そこはケンティッシュ・ロンドン Kentish London と名付けられている——、そこにおける労働貴族の地方史的研究をおこなったのである。このような方法が、ホブズボームやハリスンのような全国的レベルの研究よりも諸論点をより鋭く分析することになったのは当然のことであろう。かつてホブズボームは労働貴族を規定する要因として六つの指標を提示したが、かれ自身の分析は資料的裏付けの容易さという理由から、そのなかの第一の指標——労働者の所得の水準と規則性——を最も重要な柱としてなされたものだった。クロスィックにはこのような“経済決定論”を回避しようとする志向が強く作用している。かれが「高賃金取得者が、明確な、相対的に排他的集団を形成するということは必ずしも自明であり必然的なことではない」(p. 118)とか、経済発展は「労働貴族形成の必要条件ではあるが十分条件ではない」(p. 18)とか主張するのは、この志向の表われであろう。それ故、解明すべき問題は、工場等の労働の場における経済的優位性が、コミュニティにおいて他の者と意識や価値観のうえで明瞭に区別される社会階層にまで発展していく過程を明らかにすること、ということになる。したがって、本書の目的は、第一に、ケンティッシュ・ロンドンの熟練高給労働者のエリート

層を析出することであり、第二に、domesticity, industry, thrifty, respectability, という用語に表現された労働貴族のイデオロギーと価値観を分析することにある。この経済的分析と社会的分析の統一的把握の試みは、一方では、John Foster, *Class Struggle and the Industrial Revolution* (1974) に表現された「フォスターの硬直した経済決定論」(p. 15)を克服せんとするものであり、他方では、それとは対照的な Trygve Tholfsen, *Working Class Radicalism in Mid-Victorian England* (1976) にみられる「イデオロギーと意識の分析において、両者を思想の相互作用から説明する本質的に観念論」(p. 14)的方法にたいする批判を含意している。

かくして著者は、ケンティッシュ・ロンドンの都市成長と人口増加、職業構成と産業構成を記述したのちに、労働の場が労働者にいかなるイムパクトを与えたかを、ドック、造船、建設、機械等その地域の主要産業毎に具体的に分析することにまず第一の重点をおく。(この地域は官営ドックや王立軍需工場が集中しているという特徴がある。)というのは「労働の場とそこでの諸関係が、労働者階級内部の階層化過程の中心になる」(p. 60)からである。とりわけ、熟練産業と不熟練産業間の所得格差が重要であるが、それだけではなく、同一熟練産業間における各職種間格差もまた重要な意味をもっていると指摘する。たとえば、同じ建設産業でも、石工と鉛管工は最上級のエリートであり、レンガ積み工、大工、指物師がこれについているといったぐあいである。また、熟練工と不熟練工の賃金格差が1850年代から70年代にかけて拡大していったことも指摘される。これは、労働組合、とくにケンティッシュ・ロンドンにおける合同労組の支部が、熟練工を組織し賃金を引きあげたのになんとも、不熟練工は未組織のまま放置されたことに起因している。しかしながら、かれの分析に弱点がないわけではない。系統的な賃金資料(=賃金帳簿)が当地方には残存していないので、経済的側面の分析が不十分にしかなされていない点がある。かれは、この点を補うために、1887年の労働者諸階級の状況にかんする議会報告書等の二次資料を利用しているのだが、この弱点はいかんともしがたい。本書刊行以前に、わたくしはすでに、著者の Ph. D. 論文の弱点の一つとしてこの点を指摘したことがある

注 (2) Royden Harrison, *Before the Socialists*, 1965. とくに pp. 1~39.

(3) Henry Pelling, *The Concept of the Labour Aristocracy*, in his *Popular Politics and Society in Late Victorian Britain*, 1968, p. 61.

(4) し、著者自身もこの弱点を自認し、「系統的な地方の賃金・所得データを得ることは不可能なことが明らかになった。それ故、労働貴族形成の重要な経済的次元を地方的レベルで検討することは不可能である」(p. 61)と書き、その弱点を補うものとして、「Matsumura のフリントガラス製造工の所得に関する superb data を参照せよ」(p. 268) (この表現自体は過大評価であるが)、と注記しているので、これ以上この点について論評するのは不公正になろう。この点は著者の研究実行上の失敗ではなく、クリオがかれに微笑まなかっただけのことであるのだから。

ところで、経済的次元においては賃金格差の他に、1) アルティザン・エリートの不熟練労働者にたいする対応、および、2) 社会移動の問題が重要とされ、第一の問題については、ヴィクトリア時代のアルティザンは、自らの工場での不熟練工には積極的な援助を全くしないのにたいし、自らの地位を崩す危険性がないかぎり、他産業の不熟練労働者がストライキに入ったときなどに援助の手を差し伸べた、という点が重要であると指摘されている。たとえば、大工の労働組合のケンティッシュ・ロンドン支部は、農業労働者に闘争資金援助をすることを圧倒的多数で決定したのとは対照的に、レンガ積み工は、かれの下で働くレイバラーとの間のさまざまな格差を厳然と維持するための措置をとった。労働貴族としての存立基盤が工場内部にあるとすれば、不熟練工の存在こそが労働貴族存続の必要不可欠な条件なのだから、このことは当然の行動ともいえよう。この問題は社会移動の問題にも連なっていく。

ヴィクトリア時代の社会移動は、著者も指摘するように、歴史家によってじっさいに分析されるよりも、むしろ、その分析の必要性が言及されることが多かった問題である。著者は、社会移動を生涯移動 career mobility と世代間移動 intergenerational mobility とに分けて考えているが、たしかに昇進の機会がどの程度あるかは、労働者に大きなイムパクトを与えたにちがいない。労働貴族は、自らが労働者階級を離れてミドル・クラスに上昇することを必ずしも希望せず、労働者階級内部での高い地位を得ることを望んだということは真実であるかもしれない。だが、ここでもまた、生涯移動を解明する系統的資料はイギリスにはないと

いう困難に直面する。(5) これは反対に、世代間移動については、クロスィックは結婚登録簿を利用することによってその分析に成功している。ケンティッシュ・ロンドンの教区の利用可能なすべての結婚登録簿が分析され、最初の期間(1851~53年)には3889の事例が、二番目の期間(1873~75年)には4310の事例がとりあげられ、世代間の職業の継承性はいちじるしく階層化されていたという結論を導きだしている。たとえば、熟練造船労働者で自分自身が熟練造船労働者の息子であるものは、1850年代に64.8%であり、1870年代に63.6%であった。徒弟制度が不熟練工の当該産業への侵入を阻止し、労働組合がその制度を積極的に堅持することによって、熟練工の特権的地位を維持しただけではない。熟練工である父親は、自分の息子を熟練工にするために徒弟制度の下にしている間、家計補助的な児童労働による収入がなくても生活しうる経済的余裕をもっていたという意味で、徒弟制度は世代間の階層的移動にもひとつの役割を果たしたのである。このことは、労働貴族が単に賃金水準や昇進機会によって規定されるだけでなく、かれらの子女の職業獲得機会によっても規定されることを意味している。「かれら自身およびかれらの子供達の将来の地位向上の展望」は、すでにホブズボームの六つの指標のなかに入っているのだが、クロスィックはこれを実証的に確認したといえよう。ただ疑問になることは、なぜ職業の世代間継承性の検証にセンサス個票を使用しなかったという点である。たしかに、その目的ためには、息子の結婚時の職業が把握されるという点で、結婚以前の、ヨリ早い時期の子供の職業しか通常は把握されないセンサス個票よりも、結婚登録簿を使用の方が賢明ではある。しかし、センサス個票から得られる子供の職業を明らかにし、さらに、その結果を結婚登録簿から得られた本書で示されている結果とを比較することは、意味のある作業であると思われる。なお、センサス個票分析との関係でいえば、本書にはセンサスからえられる家族構造の分析が欠落している。著者は、「人々は、個人個人、家庭でコミュニティーで、そして労働の場で生活し、経験したのである」(p. 18)と主張し、コミュニティーと労働の場の分析の重要性が指摘されているが、家族の分析の重要性は指摘されていなければ、

注 (4) Takao Matsumura, *The Flint Glass Makers in the Classic Age of the Labour Aristocracy, 1850~1880*, Ph. D. thesis, Univ. of Warwick, 1976, p. 359.

(5) 生涯移動にかんする部分的資料は、多くはないが、もちろん残存している。本書で紹介されているフリントガラス製造工の生涯移動にかんするわたくしの分析は、その一例である(p. 276)。

じっさいに分析されてもいないのである。⁽⁶⁾ John Foster⁽⁷⁾ や Eric Hopkins がおこなっているように、労働貴族論研究のうえからも家族構造の分析は重要な意味をもっている。たとえば、労働貴族の家族は「労働平民」やミドル・クラスと比較して、妻や子供の労働力化という点でいかなる差異があるのだろうかという点や、サーヴァントの雇用の有無といった点について明らかにすることは、労働貴族の特質を浮びあがらせるからである。

つぎに、著者は産業からコミュニティーへ、すなわち経済的分析から社会的分析へと跳躍する。社会諸関係における階層化過程が、ここでは見事に分析されている。クラフトの差異が社会的階層にまで拡大していく過程は Harry Gosling のロンドンの河岸一帯の社会にかんするつぎの叙述がよくそれを示している。「はしけの船頭(熟練工)の妻は買物にでかけるときに、沖仲士や船大工(いずれも熟練工)の奥さん達といくのが相応であると感じ、波止場入夫や不熟練⁽⁸⁾レイバラーの奥さんで行くのは相応ではないと感じていた。」Social distance を測定する方法として、ここでも再び結婚登録簿が利用されている。熟練労働者出身の花婿が、熟練労働者あるいは非肉体労働者の娘と結婚する比率は、1850年代に60~70%の間であり、1870年代には若干高くなっている。これとは対照的に、レイバラー出身の花婿のばあいには、このような娘と結婚する比率は、1850年代に29%、1870年代に36%であり、レイバラーのばあいには、不熟練労働者と結婚する率が圧倒的に高い。つまり、ここでも熟練度の差異が社会的階層に発展し、階層内部の結婚類型が析出されているのである。さらに、同じ熟練労働者内部でも職種によって差異があることが示される。1850年代に、造船労働者、はしけの船頭や船夫、機械工、金属工、裁縫師は、不熟練工の娘と結婚する率が最も低く、20%をはるかに下廻る率であり、これについて、建築工、軽金属工、靴工がいた等々というように。これはきわめて魅力的な分析である。

つづいて、アルティザン・エリートの複雑かつ多面的なイデオロギーの分析に進んでいる。これらも優れた章である。歴史家が長年にわたって信じてきたのは、

中期ヴィクトリア時代の熟練工たちは respectability とか independence とかのミドル・クラスのイデオロギーを受容し、それ故、労働者階級の戦闘性は消失し、労資の対立は緩和されたという見解であった。著者がここで実証的に明らかにしたのは、このような伝統的見解は誤っているということ、つまり、労働貴族のイデオロギーはミドル・クラスのそれとは、たとえ用語が同一であっても、異質なものであった、ということである。労働貴族はミドル・クラスのイデオロギーを「吹きこまれた」のでもなければ、受容することを「説得された」のでもない。respectability も independence も、労働貴族とミドル・クラスの間では異なった意味に使用されていたのであり、その好例として飲酒があげられている。パブで労働者が飲む social drinking は、労働者階級の「文化」culture の中心的意義をもつのにたいし、ミドル・クラスの眼には、かれらの飲酒が respectable で thrifty な生活様式に反するものと映った。しかし、アルティザンは drinking が必ずしも drunkenness になるのではないことを認識していた、というのである。その結果、禁酒運動 temperance movement は失敗した。また、アルティザンは、この頃からしばしば会食、祭、集会をもつようになったが、自分たちが編成する楽隊を先頭にして行進したり、自分たちの表章を掲げたりしたのは、かれらの independence の象徴としておこなったのであり、ミドル・クラスの理想とした救貧などの国家の補助に頼らないという意味での「独立」とは異なるものであった。要するに、労働貴族はかれら自身の「文化」をもち、かれら自身のイデオロギーと価値観をもったのである。これは、かれらのクラフトにたいする高い誇りに起因している。そのことは、著者の「労働貴族はその地位を闘争と対立を通じて到達したのであり、けっして(ミドル・クラスに)降伏したことによってではなかった」(p. 15) という指摘に、端的に表現されている。サミュエル・スマイルズは、1854年に南東鉄道会社の秘書としてこの地に居住するようになって以来20年間に、一度もこの地域の労働者組織から会食や祭に招待されたこともなければ、労働者の集会であいさつや演説をしたこともないという事実は、この脈絡の

注 (6) John Foster, *Class Struggle and the Industrial Revolution*, 1974.

(7) Eric Hopkins, *The Working Classes of Stourbridge and District, 1815~1914*, Ph. D thesis, Univ. of London, 1972.

(8) Harry Gosling, *Up and Down Stream*, 1927, p. 145. (Crossickの本書 p. 119より再引用)

なかで理解されねばならない。*Self-help*は爆発的に売れ、勤勉、節欲等により労働者は社会階層を上昇していくというスマイルズの主張は、多く読まれたであろう。⁽⁹⁾にもかかわらず、当時の労働者は階層上昇の実現はきわめて小さな可能性しかないことを、自らの経験から理解しており、スマイルズの所説をけっして受容したわけではなかったのである。スマイルズの *Self-help* が労働者に受け入れられなかったことを示す事例としては、Edinburgh Trades Councilが、Councilの図書として *Self-help* を購入するか否かを議論したさいに、その本は労働者の役に立たないという理由で購入しないという決定をしたことがあげられよう。⁽¹⁰⁾ある著作が労働者問題をいかに主張し、その論理構造がいかなるものであるかということ自体は、社会思想史の重要な研究内容をなすが、社会史・労働史研究では、それに加えて、その著作が何部販売され、どの地域のどの階層がもっとも多くそれを読んだのか、といった点も、思想と運動との関連を明らかにするために必要とされ、またそのような研究もいくつか現われていた。⁽¹¹⁾しかし、クロスィックの分析は、著書の発行部数や販売地域とそれが現実に労働者に与えた影響とは、関連はあるが別個の問題であり、社会史・労働史研究では、現実に与えた影響にまで分析を深めなければならない、というきわめて重要なことを示唆しているのである。

さらに、協同組合と友愛組合の分析がつづいている。1844年のロッチデール・パイオニアーズを起源とする消費組合運動が、熟練工の self-respect を強化する役割を果たしたものとして扱えられ、具体的には、消費組合で混ぜ物のない食料品を購入でき、さらに、ツケではなく現金払いをすることによって respectability が確保できたと指摘されている。友愛組合についても、従来の研究は、Gosden の友愛組合史⁽¹²⁾でさえも、協同組合員の構成や労働者の生活における組合の役割や、そのイデオロギー上の機能といった中心的課題を、ほとんど明らかにしてこなかったという批判にたって、著者はケンティッシュ・ロンドンの友愛組合を詳細に検討している。そして、当時の友愛組合員全国数40万人という通説が誇大であることを指摘し、さらに、1860年頃を境にして、それ以前の安定的な、入会にさ

いして選択的な、大規模な友愛組合に加えて、小規模な、比較的開放された、しかしやや不安定な組合が群生したことを示している。これらの章は、地方の労働者組織の歴史のたんなる叙述ではなく、労働貴族論の観点から分析されているのが特徴であり、かつ優れた点である。これらの章に、アルティザン・エリートの政治的イデオロギーと行動の分析がつづいている。ここでは、チャーティズム、自由党、選挙法改正連盟、セキュラリズムおよび国際主義のそれぞれについての地方史的分析がなされているが、概してケンティッシュ・ロンドンには、急進主義の伝統は連続的には存在しなかったという。チャーティズムや選挙法改正運動でも、それらの全国的運動とのかかわりはそれ程強くなかったし、労働組合運動も同様であった。1852年の合同機械工組合 A・S・E のストライキが、ケンティッシュ・ロンドン支部を全国的闘争に巻きこんだ唯一の例であり、1859~61年の有名な建築工のストライキも、ロンドンの請負業者を通してわずかに影響があっただけであり、1872年の機械工の九時間労働時間運動のときも、ケンティッシュ・ロンドンでは全く争議が生じなかった。

以上のようなクロスィックの分析を通して、労働貴族の複雑な性格が浮び上ってくる。かれらは、労働者階級のヨリ下層の部分(=「労働平民」)と、労働の場においても社会においても、自らを区別しようとする。それは、基本的には、自らが熟練技術を所有していることによる。他方で、労働貴族は、ヨリ上層のミドル・クラスと自らを区別しようとする。それは、自らが手労働に従事している点においてである。労働貴族は労働密度の高い労働を嫌ったわけではなく、夜間労働を誇ることにすらあった。これが、かれら自身の「文化」をもった経済的基礎である。この労働貴族の二重性は、中期ヴィクトリア期の一見矛盾するかにみえる労働史上の諸現象を解明する鍵を与える。その矛盾とは、一方では、中期ヴィクトリア期が相対的には安定性を示し、他方では、それにもかかわらず、階級対立の緊張は継続し、政治的戦闘性や労働組合の連帯性が強まっていた、ということである。(もちろん、1850年以降をあたかも労働者が完全に体制内化し労働組合は全く戦闘性を失ったと理解するものには、この矛盾そのものが意識され

注 (9) この点は、S. Smiles, *Self-help*, Sphere Books edition, 1968. の R. Harrison による解説を参照。

(10) I. MacDougall (ed.), *The Minutes of Edinburgh Trades Council 1859~1873*, 1968.

(11) たとえば、E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, 1963.

(12) R. H. J. Gosden, *The Friendly Societies in England, 1851~71*, 1961.

書 評

ないであろうが。)そして、このような意味で中期ビクトリア時代が労働貴族の「黄金時代」 Golden Age (R. ハリスン) ないし「古典的時代」 Classic Age (E. ホブズボーム) をもちえたのは、伝統的な熟練が技術革新によって大規模に破壊され代替される以前の発展段階においてであった。ケンティッシュ・ロンドンの社会史・労働史研究では、本書以外に資料が新たに発見されることはないと思われるほどの徹底した資料蒐集と、その結果としての驚嘆すべき量の一次資料の蓄積にも

とづいてなされたこのクロソイックの研究が、労働貴族論研究に価値ある貢献をなしたことは疑う余地がない。わたくしは本書の刊行を、著者の友人の一人として心からよろこぶものである。(なお本稿は *Bulletin, Society for the Study of Labour History*, no. 38, Spring 1979掲載のわたくしの書評とほぼ同一の内容である。)

松 村 高 夫
(経済学部助教授)

シンポジウム叢書		慶應義塾経済学会編			
書名	発行年月	発行所	定価	備考	
経済学方法論の諸問題	'67. 9.	東洋経済新報社	800 ^円		
日本経済の近代化	'67.12.	〃	850		
後進地域の経済開発	'68. 9.	〃	1,100		

経済学研究叢書						
	著者・訳者	書名	発行年月	発行所	定価	備考
1	高 村 象 平	ドイツ・ハンザの研究	'59.12.	日本評論新社	470円	
2	気 賀 健 三	ソビエト経済の研究	'60. 1.	〃	280	
3	加 藤 寛	ソ連の経済成長と経済計画	'60. 4.	〃	320	
4	富 田 重 夫	正統学派、限界主義およびマルクシズムの体系的理解	'61.12.	〃	380	
5	大 熊 一 郎	フィスカル・ポリシーの理論構造	'63. 3.	〃	400	品切
6	中 村 勝 己	アメリカ資本主義の成立	'66. 2.	日本評論社	1,200	
7	矢内原 勝	金融的従属と輸出経済	'65.12.	〃	1,000	
8	ゴッシェン	——ガーナ経済研究——				
9	町田 義一郎 訳	外国為替の理論	'68. 3.	〃	650	品切
10	スリッヘル・ファン・バート	西ヨーロッパ農業発達史	'69.11.	〃	3,200	
11	速 水 融 訳	イタリア経済分析	'70. 5.	〃	2,300	
12	尾 城 太郎 丸	日本中小工業史論	'70. 9.	〃	1,800	
13	岡 田 泰 男	アメリカ公有地制度史の研究	'73. 5.	陽 樹 社	2,800	
	ウィリアム・ゴドウィン	政治的正義(財産論)	'73. 7.	〃	2,200	
	白 井 厚 訳					